

## ひふみ神示 第一巻 上つ巻 全四二帖

### 第一帖 (一)

二二は晴れたり、日本晴れ。神の国のまことの神の力をあらはす代となれる。仏もキリストも何も彼もはつきり助けて七六かしい御苦勞のない代が来るからみたまを不断に磨いて一筋の誠を通うして呉れよ。いま一苦勞あるが、この苦勞は身魂を磨いて居らぬと越せぬ、この世初って二度とない苦勞である。このむすびは神の力でないと何も出来ん、人間の算盤では弾けんことぞ。日本はお土があかる。外国はお土がさかる。都の大洗濯、鄙の大洗濯、人のお洗濯。今度は何うもこらへて呉れというところまで、後へひかぬから、その積りでかかって来い、神の国の神の力を、はっきりと見せてやる時が来た。嬉しくて苦しむ者と、苦しくて喜ぶものと出て来る ◎ は神の国、神の力でないと何んにも成就せん、人の力で何が出来たか、みな神がさしてゐるぞ、いつでも神かかれる様に、綺麗に洗濯して置いて呉れよ。戦は今年中と言つてゐるが、そんなちよろこい戦ではない、世界中の洗濯ざから、いらぬものが無くなるまでは、終らぬ道理分らぬか。臣民同志のいくさでない、カミと神、アカとあか、ヒトと人、ニクと肉、タマと魂のいくさぞ。己の心見よ、戦が済んでいないである、それで戦が済むと思つてゐるとは、あきれらものぞ、早く掃除せぬと間に合わん、何より掃除が第一。さびしさは人のみかは、神は幾万倍ぞ、さびさ越へて時を待つ。加実が世界の王になる、てんし様が神と分らん臣民ばかり、口と心と行と、三つ揃うた

まことを命といふぞ。神の臣民みな命になる身魂掃除身魂結構、六月の十日、ひつくのかみ。

## 第二帖（二）

親と子であるから、臣民は可愛いから旅の苦をさしてあるのに、苦に負けてよくもここまで落ちぶれて仕まうたな。鼠でも三日先のことを知るのに、臣民は一寸先さへ分らぬほどに、よう曇りなされたな、それでも神の国の臣民、天道人を殺さず。食べ物がなくなっても死にはせぬ、ほんのしばらくぞ。木の根でも食うて居れ。闇のあとには夜明け来る。神は見通しざから、心配するな。手柄は千倍万倍にして返すから、人に知れたら帳引きとなるから、人に知られんやうに、人のため国のため働けよ、それがまことの神の神民ぞ。酒と煙草も勝手に作って暮らせる善き世になる、それまで我慢出来ない臣民沢山ある。早く㊦（モト）の神の申す通りにせねば、世界を泥の海にせねばならぬから、早うモト㊦心になりて呉れよ、神頼むぞよ。盲が盲を手を引いて何処へ行く積りやら、気のついた人から、まことの神の入れものになりて呉れよ悪の楽しみは先に行くほど苦しくなる、神のやり方は先に行くほどだんだんよくなるから、初めは辛いなれど、さきを楽しみに辛棒して呉れよ。配給は配給、統制は統制のやり方、神のやり方は日の光、臣民ばかりでなく、草木も喜ぶやり方ぞ、日の光は神のこころ、稜威ぞ。人の智恵で一つでも善き事したか、何もかも出来損ひばかり、にっちもさっちもならんことにしてゐて、まだ気づかん、盲には困る困る。救はねばならず、助かる臣民はなく、泥海にするは易いなれど、それでは元の神様にす

まず、これだけにこと分けて知らしてあるに、きかねば  
まだまだ痛い目を見せねばならん。冬の先が春とは限ら  
んぞ。㊦の国を八つに切つて殺す悪の計画、㊦の国にも  
外国の臣が居り、外国にも神の子がある。岩戸が明けた  
ら一度に分かる。六月の十日、書は、ひつくの神、てん  
め御苦労ぞ。

### 第三帖（三）

よごと

善言は神、なにも上下、下ひっくり返つてゐるから、分  
らんから神の心になれば何事も分るから、鏡を掃除して  
呉れよ。今にこのおつげが一二三ばかりになるから、そ  
れまでに身魂をみがいて置かんと、身魂の曇つた人には  
何ともよめんから、早く神こころに返りて居りて呉れ、  
何も一度に出て来る。海が陸になり陸が海になる。六月  
十一日の朝のお告げ、みよみよみよひつくの神。

### 第四帖（四）

急ぐなれど、臣民なかなかいふこときかぬから、言ふ  
こときかねば、きく様にしてきかす。神には何もかも出  
来てゐるが、臣民まだ目覚めぬか、金のいらぬ楽の世に  
なるぞ。早く神祀りて呉れよ、神祀らねば何も出来ぬぞ。  
表の裏は裏、裏の裏がある世ぞ。神をだしにして、今の  
上の人があるから、神の力が出ないのぞ。お上に大神を  
祀りて政事をせねばならん。この神をまつるのは、みは  
らし台ぞ、二二みはらし台ぞ、早く祀りてみつげを世に  
広めて呉れよ。早く知らさねば日本がつぶれる様なこと  
になるから、早う祀りて神の申す様にして呉れ。神急け

るよ。上ばかりよくてもならぬ、下ばかりよくてもならぬ、上下揃ふたよき世が神の世ぞ。凡も一十もあてにならぬ、世界一つになりて ⑤ の国に寄せて来るぞ。それなのに今のやり方でよいと思うてゐるのか、分らねば神に

まつりごと

たづねて政事せねばならぬと云ふことあだ分らぬか。神

まつり

と人とが交流合はしてこの世のことが、さしてあるのぞ。人がきかねば神ばかりで始めるぞ。神ばかりで洗濯するのは早いけれど、それでも臣民が可哀そうなから、臣民みなやり直さねばならぬから、気をつけてゐるのに何してゐるのぞ、いつ何んなことあつても知らんぞ。神祭り第一、神祭結構。二三の木ノ花咲耶姫の神様を祀り呉れよ。コハナサクヤ姫様も祀りて呉れよ。六月十三日、ひつくのか三。

## 第五帖（五）

二二

富士とは神の山のことぞ。神の山はみな富士といふのぞ。見晴らし台とは身を張らすことぞ、身を張らすとは、身のなかを神にて張ることぞ。臣民の身の中に一杯に神の力を張らすことぞ。大庭の富士を探して見よ、神の米が出て来るから、それを大切にせよ。富士を開くとは心に神を満たすことぞ。ひむかとは神を迎えることぞ、ひむかはその使ひぞ。ひむかは神の使ざから、九の道を早う開ひて呉れよ、早う伝えて呉れよ、ひむかのお役は人の病をなほして神の方へ向けさすお役ぞ、この理をよく心得て間違ひないやうに伝えて呉れよ。六月十四日ひつくのか三。

## 第六帖（六）

外国の飛行機が来るとさわいでゐるが、まだまだ花道ぞ、九、十となりたらボツボツはつきりするぞ。臣民は目のさきばかりより見えんから、可哀さうなから 気をつけてゐるのに 何してゐるのか。大切なこと忘れてゐるのに気づかんか。この知らせをよく讀みて呉れよ。十月まで待て。それまでは、このままで居れよ。六月十七日、ひつくのか三。

## 第七帖（七）

いくら金積んで神の御用さして呉れいと申しても、因縁のある臣民でないと御用出来んぞ。御用する人は何んなに苦しくても心は勇むぞ。この神は小さい病直しや按摩の真似させんぞ、大き病直すのぞ。神が開くから、人の考へで人を引張って呉れるなよ。六月十七日一二のか三。

## 第八帖（八）

秋が立ちたら、この道ひらくかた出て来るから、それまでは神の仕組書かして置くから、よく讀んで腹の中によく入れて置いて呉れよ。その時になりて、あわてて何も知らんといふ様ではならんぞ、それまでに何もかにも知らして置くから、縁のある方から、この知らせをよく讀んで腹の中に入れて置いて呉れよ。六月の十七日、ひつくのか三。

## 第九帖（九）

この世のやり方、わからなくなったら、この神示録をよしるしまして呉れと云うて、この知らせを取り合ふから、その時になりて慌てん様にして呉れよ。日本の国は一度つぶ

れた様になるのぞぞ。一度は神も仏もないものと皆が思う世が来るのぞ。その時にお蔭を落とさぬやうシツカリと神の申すこと腹に入れて置いて呉れよ。六月の十七日ひつくのか三。

### 第十帖（一〇）

神に目を向ければ神がうつり、神に耳向ければ神がきこえ、神に心向ければ心にうつる、掃除の程度によりて神のうつりから違ふぞ。掃除出来た方から神の姿うつるぞ、それだけにうつるぞ。六月の十九日、ひつくのか三。

### 第十一帖（一一）

いづくも土にかへると申してあろうが、東京も元の土に一ときはけるから、その積りでみて呉れよ。神の申したことは違はんぞ。東京は元の土に一時はかへるぞ、その積りで用意して呉れよ。六月の十九日、一二のか三。

### 第十二帖（一二）

大将を誰も行かれん所へ連れて行かれんやうに、上の人、気をつけて呉れよ。この道はちつとも心ゆるせんまことの神の道ぞ。油断すると神は代りの身魂使うぞ。六月の二十一日の朝、ひつくのか三。

### 第十三帖（一三）

元の人三人、その下に七人、その下に七七・四十九人、合して五十九の身魂あれば、この仕組は成就するのぞ、この五十九の身魂は神が守つてあるから、世の元の神かかりて大手柄をさすから、神の申すやう何事も、身魂みがいて呉れよ、これが世の元の神の数ぞ、これだけの身

魂が力合はしてよき世の礎となるのぞ。この身魂はいづれも落ちぶれてゐるから、たづねて来てもわからんから、よく気をつけて、どんなに落ちぶれてゐる臣民でも、たづねて来た人は、親切にしてかへせよ。何事も時節が来たぞ。六月の二十一日、ひつくのか三。

#### 第十四帖（一四）

ふで  
この神示よく読みて呉れよ、読めば読むほど何もかも分りて来るぞ、心とは神民の申す心ではないぞ身魂とは神民の申す身魂でないぞ身たまとは身と魂と一つになってゐるもの云ふぞ、神の神民身と魂のわけ隔てないぞ身は魂、魂は身ぞ外国は身ばかりの所あり魂ばかりの所あり神は身魂の別ないぞ、この事分りたら神の仕組みがぼつぼつ分るぞ身魂の洗濯とは心の洗濯とは、魂ばかりの洗濯でないぞ、よく気をつけて呉れ神の申すことちがはんぞよ。六月の二十二日、ひつくのか三。

#### 第十五帖（一五）

今度は末代動かぬ世にするのぞから、今までの様な宗教や教への集団つどひにしてはならんぞ、人を集めるばかりが能ではないぞ、人も集めねばならず、六ヶ敷い道ぞ。縁ある人は早く集めて呉れよ、縁なき人いくら集めても何もならんぞ、縁ある人を見分けて呉れよ。顔は神の臣民でも心は外国身魂ぞ、顔は外国人でも身魂は神の臣民あるぞ。やりかけた戦ぞ、とことんまで行かねば納まらん。臣民一度は無くなるところまでになるぞ、今のうちにこ

の神示よく読んでみて呉れよ。九月になったら用意して呉れよ。六月の二十四日、ひつくのか三。

## 第十六帖（一六）

ひふみの火水とは結ぞ、中心の神、表面に世に満つことぞ、ひらき睦び、中心に火集ひ、ひらく水。神の名二つ、カミと神世に出づ。早く鳴り成り、世、新しき世と、国々の新しき世と栄へ結び、成り展く秋来る。弥栄に神、世にみちみち、中心にまつろひ展き結ぶぞ。月出でて月なり、月ひらき弥栄え成り、神世ことごと栄ゆ。早く道ひらき、月と水のひらく大道、月の仕組、月神と日神二つ展き、地上弥栄みちみち、世の初め悉くの神も世と共に勇みに勇むぞ。世はことごと統一し神世の礎極まる時代来る、神世の秘密と云ふ。六月二十四日、一二 <sup>ふみ</sup> 文。  
(原文掲載)

## 第十七帖（一七）

この世はみな神のものざから臣民のものと云ふもの一つもないぞ。お土からとれた物、みな先づ神に供へよ、それを頂いて身魂を養ふ様になってみるのに、神には献げずに、臣民ばかり喰べるから、いくら喰べても身魂ふとらぬぞ、何でも神に供へてから喰べると身魂ふとるぞ。今の半分で足りるぞ、それが臣民の頂き方ぞ。六月の二十五日、ひつくのか三。

## 第十八帖（一八）

岩戸開く役と岩戸しめる役とあるぞ。一旦世界は言ふに言はれんことが出来るぞ、シツカリ身魂みがいて置いて呉れよ、身魂みがき第一ぞ。この道開けて来ると、世の



中のえらい人が出て来るから、どんなえらい人でも分らん神の道ざからよくこの神示読んで置いて何んな事でも教へてやれよ、何でも分らんこと無いやうに、この神示で知らして置くから、この神示よく読めと申すのぞ。この道はスメラが道ざ、すめるみ民の道ぞ。みそぎせよ、はらひせよ、臣民早くせねば間に合はんぞ。岩戸開くまでに、まだ一苦勞あるぞ、この世はまだまだ悪くなるから、神も仏もこの世には居らぬのざといふところまで、とことんまで落ちて行くぞ。九月に気をつけよ、九月が大切の時ぞ。臣民の心の鏡くぼ凹んであるから、よきことわるく映り、わるきことよく映るぞ。今の上に立つ人、一つも真の善い事致しては居らん、これで世が治まると思ふてか、あまりと申せばあまりぞ。神は今まで見て見んふりしてゐたが、これからは厳しくどしどしと神の道に照らして神の世に致すぞ、その積りでめて呉れよ。神の申すこと、ちつともちがはんぞ。今の世に落ちてゐる臣民、高い所へ土持ちばかり、それで苦しんでゐるのぞ。早う身魂洗濯せよ、何事もハッキリと映るぞ。六月二十六日 ひつくのかみ。

## 第十九帖（一九）

神の国 ㊦ の山に ㊧ 祭りて呉れよ、祭るとは神にまつらふことぞ、土にまつらふことぞ、人にまつらふことぞ、祭り祭りて嬉し嬉しの世となるのぞ、祭るには先づ掃除せねばならんぞ、掃除すれば誰にでも神かかるやうに、日本の臣民なりて居るぞ、神州清潔の民とは掃除してキレイになった臣民のことぞ。六月二十七日、一二 ㊨。

## 第二十帖（二〇）

神がこの世にあるならば、こんな乱れた世にはせぬ筈ぞと申す者沢山あるが、神には人のいふ善も悪もないものぞ。よく心に考へて見よ、何もかも分りて来るぞ。表の裏は裏、裏の表は表ぞと申してあろうが、一枚の紙にも裏表、ちと誤れば分らんことになるぞ、神心になれば何もかもハッキリ映りて来るのぞ、そこの道理分らずに理屈ばかり申してゐるが、理屈のない世に、神の世にして見せるぞ。言挙げせぬ国とはその事ぞ、理屈は外国のやり方、神の臣民言挙げずに、理屈なくして何もかも分かるぞ、それが神の真の民ぞ。<sup>トリ</sup>足許から鳥が立つぞ、十理たちてあわてても何にもならんぞ、用意なされよ、上下グレンと引繰り返るぞ。上の者下に、落ちぶれた民上になるぞ、岩戸開けるぞ、夜明け近づいたから、早う身魂のせんだくして呉れよ、加美の申すこと千に一つもちがはんぞ。六月二十七日、ひつくのか三。

## 第二十一帖（二一）

<sup>かみ</sup>世の元の大神の仕組といふものは、神々にも分らん仕組であるぞ、この仕組分りてはならず分らねばならず、なかなか六ヶ敷い仕組であるぞ、知らしてやりたいなれど、知らしてならん仕組ぞ。外国がいくら攻めて来るとも、世界の神々がいくら寄せて来るとも、ぎろぎろになりたら神の元の神の神力出して岩戸開いて一つの王で治める神のまことの世に致すのであるから、神は心配ないなれど、ついて来れる臣民少ないから、早う掃除して呉れと申すのぞ、掃除すれば何事も、ハッキリと映りて楽

なことになるから、早う神の申すやうして呉れよ。今度  
はとことには変らぬ世に致すのだから、世の元の大神で  
ないと分らん仕組ざ。洗濯できた臣民から手柄立てさし  
てうれしうれしの世に致すから、神が臣民にお礼申すか  
ら、一切ごもく捨てて、早う神の申すこと聞いて呉れよ。  
因縁の身魂は何うしても改心せねばならんのだから、早  
う改心せよ、おそい改心なかなか六ヶ敷。神は帳面につ  
ける様に何事も見通しざから、神の帳面間違ひないから、  
神の申す通りに、分らんことも神の申す通りに従ひて呉  
れよ。初めつらいなれどだんだん分りて来るから、よく  
言うこと聞いて呉れよ、外国から攻めて来て日本の国丸  
つぶれといふところで、元の神の神力出して世を建てる  
から、臣民の心こころも同じぞ、江戸も昔のやうになるぞ、神  
の身体から息いき出来ぬ様にしてゐるが、今に元のままにせ  
なならんことになるぞ。富士から三十里四里離れた所へ、  
仮に祀りて置いて呉れよ。富士は神の山ざ、いつ火を噴  
くか分らんぞ、神は噴かん積りでも、いよいよとなれば  
噴かなならんことがあるから、それまでは離れた所へ祀  
りて呉れ。まつりまつり結構、六月の二十八日、ひつ九  
のか三。

## 第二十二帖（二二）

いよいよとなれば、外国強いと見れば、外国へつく臣民  
沢山できるぞ。そんな臣民一人もいらぬ、早うまことの  
者ばかりで神の国を堅めて呉れよ。六月二十の八日、一  
二のか三。

## 第二十三帖（二三）

神なぞ何うでもよいから、早く楽にして呉れと言ふ人沢山あるが、こんな人は、今度はみな灰にして、なくしてしまふから、その覚悟して居れよ。六月の二十八日、ひつくのか三。

## 第二十四帖（二四）

七の日はものの成る日ぞ。「ア」と「ヤ」と「ワ」は本の御用ぞ、「イ」「ウ」の身魂は介添えの御用ぞ。あとはだんだん分りて来るぞ。六月の二十八日は因縁の日ぞ、一二のか三。

## 第二十五帖（二五）

一日に十万、人死にだしたら神の世がいよいよ近づいたのだから、よく世界のことを見て皆に知らして呉れよ。

この神は世界中のみか天地のことを委まかされてある神の一柱ざから、小さいことを言ふのではないぞ、小さいことも何でもせなならんが、小さい事と臣民思ふてみると間違ひが起こるから、臣民はそれぞれ小さい事もせなならんお役もあるが、よく気をつけて呉れよ。北から来るぞ。神は気もない時から知らして置くから、よくこの神示、心にしめて居れよ。一日一握りの米に泣く時あるぞ、着る物も泣くことあるぞ、いくら買溜めしても神のゆるさんもの一つも身には付かんぞ、着ても着ても、食うても食うても何もならん餓鬼がきの世ぞ。早う神心にかへりて呉れよ。この岩戸開くのは難儀の分らん人には越せんぞ、踏みつけられ踏みつけられている臣民のちからはお手柄

さして、とことには名の残る様になるぞ。元の世に一度戻さなならんから、何もかも元の世に一度は戻すのだから、その積りで居れよ、欲張っていろいろ買溜めしてゐる人、気の毒が出来るぞ、神よく気をつけて置くぞ。この道に縁ある人には、神からそれぞれの神を守りにつけるから、天地の元の<sup>てん</sup>靛の大神、くにの大神と共に、よく祀りて呉れよ。六月三十日、ひつくのか三。

## 第二十六帖（二六）

「あ」の身魂とは天地のまことの一つの掛替えのない身魂ぞ、「や」とはその左の身魂「わ」とは右の身魂ぞ、「や」には替へ身魂<sup>や</sup>あるぞ、「わ」には替へ身魂<sup>わ</sup>あるぞ、「あ」も「や」も「わ」も<sup>や</sup>も<sup>わ</sup>も一つのもので。みたま引いた神かかる臣民を集めるから急いで呉れるなよ、今に分かるから、それまで見てみて呉れよ。

「い」と「う」はその介添えの身魂、その魂と組み「え」と「を」を、「ゑ」と「お」が生まれるぞ、いづれは分ることだから、それまで待ちて呉れよ。言ってやりたいなれど、今言つては仕組成就せんから、邪魔はいるから、身魂掃除すれば分かるから、早う身魂洗濯して呉れよ。神祀るとはお祭りばかりでないぞ、神にまつらふことぞ、神にまつらふとは神に従ふことぞ、神にまつらふには洗濯せなならんぞ、洗濯すれば神かかるぞ、神かかれば何もかも見通しぞ、それで洗濯洗濯と臣民耳にたこ出来るほど申してゐるのぞ。七月一日ひつくのかみの道ひらけあるぞ。

## 第二十七帖（二七）

何もかも世の元から仕組みてあるから神の申すところへ行けよ。元の仕組は富士ぞ、次の仕組はウシトラニニ三十里四里、次の仕組の山に行きて開いて呉れよ、今は分るまいが、やがて結構なことになるのだから、行きて神祀りて開いて呉れよ、細かく知らしてやりたいなれど、それでは臣民の手柄なくなるから、臣民は子ざから、子に手柄さして親から御礼申すぞ。行けば何もかも善くなる様に、昔からの仕組してあるから、何事も物差しで測った様に行くぞ。天地がうなるぞ、上下引繰り返るぞ。悪の仕組にみなガの臣民だまされてゐるが、もう直ぐ目さめるぞ、目さめたらたづねてござれ、この神のもとへ来てきけば、何でも分る様に神示で知らしておくぞ。秋立ちたら淋しくなるぞ、淋しくなりたらたづねてござれ、我を張つてみると、いつまでも分らずに苦しむばかりぞ。この神示も身魂により何んなにでも、とれるやうに書いておくから、取り違ひせんやうにして呉れ、三柱と七柱揃うたら山に行けよ。七月一日、ひつくのか三。

## 第二十八帖（二八）

世界中まるめて神の一つの詞で治めるのぞ。それが神のやり方ぞ、百姓は百姓、鍛治は鍛治と、今度はとことには定まるのぞ、身魂の因縁によりて今度はハッキリと定まって動かん神の世とするのぞ、茄子の種には瓜はならんぞ、茄子の蔓には瓜をならすのは悪の仕組、今の世はみなそれでないか。これで世が治ったら神はこの世に無いものぞ。神とアクとの力競べぞ。今度はアクの王も神

の力には何うしてもかなはんと心から申す所まで、とことんまで行くのだから、アクも改心すれば助けて、よき方に廻はしてやるぞ。神の国を千切りして膾にするアクナマスの仕組は分りて居る。アクの神も元の神の仕組を九分九厘まで知ってゐて、天地ひっくり返る大戦となるのぞ。残る一厘は誰も知らぬ所に仕かけてあるが、この仕組、心で取りて呉れよ、神も大切だが、この世では臣民も大切ぞ。臣民この世の神ぞ、と言ふて鼻高になると、ポキン折れるぞ。七月一日、ひつ九のか三。

### 第二十九帖（二九）

この世が元の神の世になると云ふことは、何んなかみにも分って居れど、何うしたら元の世になるかといふこと分らんぞ、かみにも分らんこと人にはなほ分らんのに、自分で何でもする様に思ふてゐるが、サツパリ取り違ひぞ。やって見よれ、あちへ外れこちへ外れ、いよいよ何うもならんことになるぞ。最後のことはこの神でないと分らんぞ。いよいよとなりて教へて呉れと申しても間に合はんぞ。七月一日、ひつ九のか三。

### 第三十帖（三〇）

富士を開いたらまだ開くところあるのぞ、鳴戸へ行くことあるのだからこのこと役員だけ心得て置いて呉れよ。七月一日、ひつ九のか三。

### 第三十一帖（三一）

今度の御用は結構な御用ぞ、いくら金積んでも、因縁ない臣民にはさせんぞ。今に御用させて呉れと金持って来るが、一一神に聞いて始末せよ。汚れた金御用にならん

から、一厘も受取ることならんぞ。汚れた金邪魔になるから、まことのもの集めるから、何も心配するなよ。心配気の毒ぞよ。何も神がするから慾出すなよ、あと暫くぞよ、日々に分りて来るから、素直な臣民うれしうれしで暮さすから。

### 第三十二帖（三二）

世の元からヒツグとミツグとあるぞヒツグは◎の系統ぞ、ミツグは○の系統ぞ。ヒツグはまことの神の臣民ぞ、ミツグは外国の民ぞ。◎と○と結びて一二三となるのひふみざから、外国人も神の子ざから外国人も助けなならんぞ申してあらうがな。一二三唱へて岩戸あくぞ。神から見た世界の民と、人の見た世界の人とは、さっぱりアベコベであるから、間違はん様にして呉れよ。ひみつの仕組とは一二三の仕組ざ、早う一二三唱へて呉れよ、一二三唱へると岩戸あくぞ。七月二の日、ひつくのか三。

### 第三十三帖（三三）

神の用意は済んであるのざから、民の用意早うして呉れよ、用意して早う祀りて呉れよ。富士は晴れたり日本晴れと申すこと、だんだん分りて来るぞ。神の名のついた石があるぞ、その石、役員に分けてそれぞれに守護の神つけるぞ、神の石はお山にあるから、お山開いて呉れよ。ひつぐの民、みつぐの民、早う用意して呉れよ、神急けるぞ。七月二日、ひつくのか三。



### 第三十四帖（三四）

何事も天地に二度とないことで、やり損ひしてならん  
た た よ へ る く に か た め  
多陀用幣流天地の修理固成の終りの四あけであるから、  
これが一番大切の役であるから、しくじられんから、神  
がくどう申してゐるのぞ、神々さま、臣民みなきいて呉  
ひ ふ み み よ い づ  
れよ。一二三の御用出来たら三四五の御用にかからなな  
らんから、早う一二三の御用して呉れよ。何も心配ない  
から神の仕事をして呉れよ、神の仕事して居れば、どこ  
にゐても、いざといふ時には、神がつまみ上げて助けて  
ひとひ  
やるから、御用第一ぞ。一日に十万人死ぬ時来たぞ、  
世界中のことざから、気を大きく持ちてゐて呉れよ。七  
月の三日、ひつくのか三。

### 第三十五帖（三五）

死んで生きる人と、生きながら死んだ人と出来るぞ。神  
のまにまに神の御用して呉れよ、殺さなならん臣民、ど  
こまで逃げてても殺さなならんし、生かす臣民、どこにゐ  
ても生かさなならんぞ。まだまだ悪魔はえらい仕組して  
たと  
ゐるぞ、神の国千切りと申してあるが、喩へではないぞ、  
いよいよとなりたら神が神力出して上下引つくり返して  
神代に致すぞ、とはの神代に致すぞ。細かく説いてやり  
しんこく  
たいなれど、細かく説かねば分らん様では神国の民とは  
云はれんぞ。外国人には細かく説かねば分らんが、神の  
臣民には説かいても分る身魂授けてあるぞ、それで身魂  
みがいて呉れと申してあるのぞ。それとも外国人並にし  
て慾しいのか、曇りたと申してもあまりぞ。何も心配い

らんから、お山開いて呉れよ江戸が火となるぞ、神急けるぞ。七月の七日、ひつくのか三。

### 第三十六帖（三六）

元の神代に返すといふのは、たとへでないぞ。穴の中に  
住まなならんこと出来るぞ、生の物食うて暮さなならん  
し、臣民取り違ひばかりしてゐるぞ、何もかも一旦は天地へお引き上げぞ、われの慾ばかり言つてゐると大変が出来るぞ。七月の九日、ひつくのか三。

### 第三十七帖（三七）

人の上の人、みな臭い飯食ふこと出来るから、今から知らして置くから気をつけて呉れよ。お宮も一時は無くなる様になるから、その時は、みがけた人が神のお宮ぞ。早う身魂みがいておけよ、お宮まで外国のアクに壊されるやうになるぞ。早くせねば間に合はんことぞ、ひつくのか三。

### 第三十八帖（三八）

残る者の身も一度は死ぬことあるぞ、死んでからまた生き返るぞ、三分の一の臣民になるぞ、これからがいよいよの時ぞ。日本の臣民同志が食い合ひするぞ、かなわんと云うて外国へ逃げて行く者も出来るぞ。神にシツカリとすが縋りて居らんと何も分らんことになるから、早く神に縋りて居れよ、神ほど結構なものはないぞ。神にも善い神と悪い神とあるぞ、雨の日は雨、風の日は風といふこと分らんか、それが天地の心ぞ、天地の心を早う悟りて下されよ。いやならいやで外に代りの身魂があるから

神は頼まんぞ、いやならやめて呉れよ。無理に頼まんぞ。神のすること一つも間違ひないので、よく知らせを読んで下されよ、ひつきのか三。

### 第三十九帖（三九）

地震かみなり火の雨降らして大洗濯するぞ。よほどシツカリせねば生きて行けんぞ。カミカカリが沢山出て来て、わけの分らんことになるから、早く此の理をひらいて呉れよ。神界ではもう戦の見通しがついてあるなれど、今はまだ臣民には申されんぞ。改心すれば分りて来るぞ、改心第一ぞ、早く改心第一ざ、ひつくのか三。

### 第四十帖（四〇）

北も南も東も西もみな敵ぞ、敵の中にも味方あり、味方の中にも敵あるのぞ。きんの国へみなが攻めて来るぞ。神の力をいよいよ現はして、どこまで強いのか、神の力を現わして見せてやるから、攻めて来て見よ、臣民の洗濯第一と言って居ること忘れるなよ、一二のか三。

### 第四十一帖（四一）

人の知らん行かれん所で何してあるのぞ。神にはよう分って居るから、いよいよといふ時が来たら助けやうもないから、気をつけてあるのにまだ目ざめぬか。闇のあとが夜明けばかりと限らんぞ。闇がつづくかも知れんぞ。何もかも捨てる神民、さひはひぞ、捨てるとつかめるぞ、ひつきのか三。

## 第四十二（四二）

初めの御用はこれで済みたから、早う お山開いて呉れよ。お山開いたら、次の世の仕組書かすぞ、一月の間に書いて呉れた神示は「上つ巻」として後の世に残して呉れよ、これから一月の間に書かす神示は次の世の、神の世の仕組の神示しむざから、それは「下つ巻」として後の世に残さすぞ、その積りで気をつけて呉れよ。御苦勞なれども世界の臣民の為ふでざから、何事も神の申すこと、すなをに聞いて下されよ。七月の九日、ひつくのかみ三かく。  
（上つ巻了）